

文房四宝

資料提供

開明(株)

【第十九回】「墨汁のまとめ」

◇はじめに

書道において欠かすことのできない文房四宝(筆・墨・硯・紙など)について、基本的な知識を中心に連載しています。第十四回(令和七年五月号)では、墨汁の種類とその選び方について解説しました。今回は、これまでの墨汁の連載をまとめます。

◆墨汁は日本の発明品

初めに、墨汁の歴史からおさらいします。学校や書塾の先生から、「筆を持つ前に墨を磨り心を落ち着かせて、精神統一すること」という指導を受けた方も多いのではないのでしょうか。この言葉は、書道の世界では大切な教えの一つです。こうした考えがある一方で、限られた時間の中で稽古しなければならぬときもあります。ましてや時の流れが以前より早くなったように感じられる現代では、「墨汁」を活用することですぐに書き始めることができます。もともと、墨汁は授業時間が短い学校教育の場などで、一文字でも多く書を学べる便利な道具

として、開発され活用されてきました。

開明株式会社の創業者、田口精爾(写真1)

は蔵前高等工業専門学校(現在の東京工業大学)で応用化学を学び、墨の原料である油煙と膠の研究に専念して、明治20年代に墨汁を発明し



【写真1】開明株式会社の創業者 田口精爾

ました(写真2・3)。筆や固形墨、硯、紙など「文房四宝」が中国から伝来したのに対し、墨汁はいわば、真正正銘のメイド・イン・ジャパンの製品だといえます。

墨汁には固形墨と比較されてきた歴史があります。今でこそ大きな展覧会の作品の制作でも墨汁は多く使われていますが、開発初期の墨汁は「墨汁を使うと筆が傷む、文字が光る」と言われ、固形墨と区別されていました。

しかし、原料の膠や塩化カルシウムの精製度を上げて弱点を克服し、今日では固形墨と同等あるいはそれ以上の品質にまで改善されました。その他用途に応じたさまざまな墨汁が開発されており、近年では学校教育の場に加えて、著名な書家の先生方にもご愛用いただいています(写真4・5)。

◆墨汁の原料と製造工程

■主な原料

続いて、墨汁の原料と製造工程をおさらいします。墨汁の主な原料は次の通りです。

・カーボンブラック

固形墨の原料の油煙に匹敵するもので、石油や石炭から採れる重質油などを分解して製造さ



【写真3】初期の開明墨汁
(黄色い缶に黒いキャップ)



【写真4】時間の限られた授業などの場面で
素早くお使いいただけます



【写真5】さまざまな容器で展開しています



【写真2】開明株式会社の前身である田口商會の看板

れた、品質の安定した化学製品です。油煙のよ
うな茶系から松煙しょうえんのような青系まで色の種類
が非常に多く、開明独自のカーボンブラックで
製造した墨汁もあります。

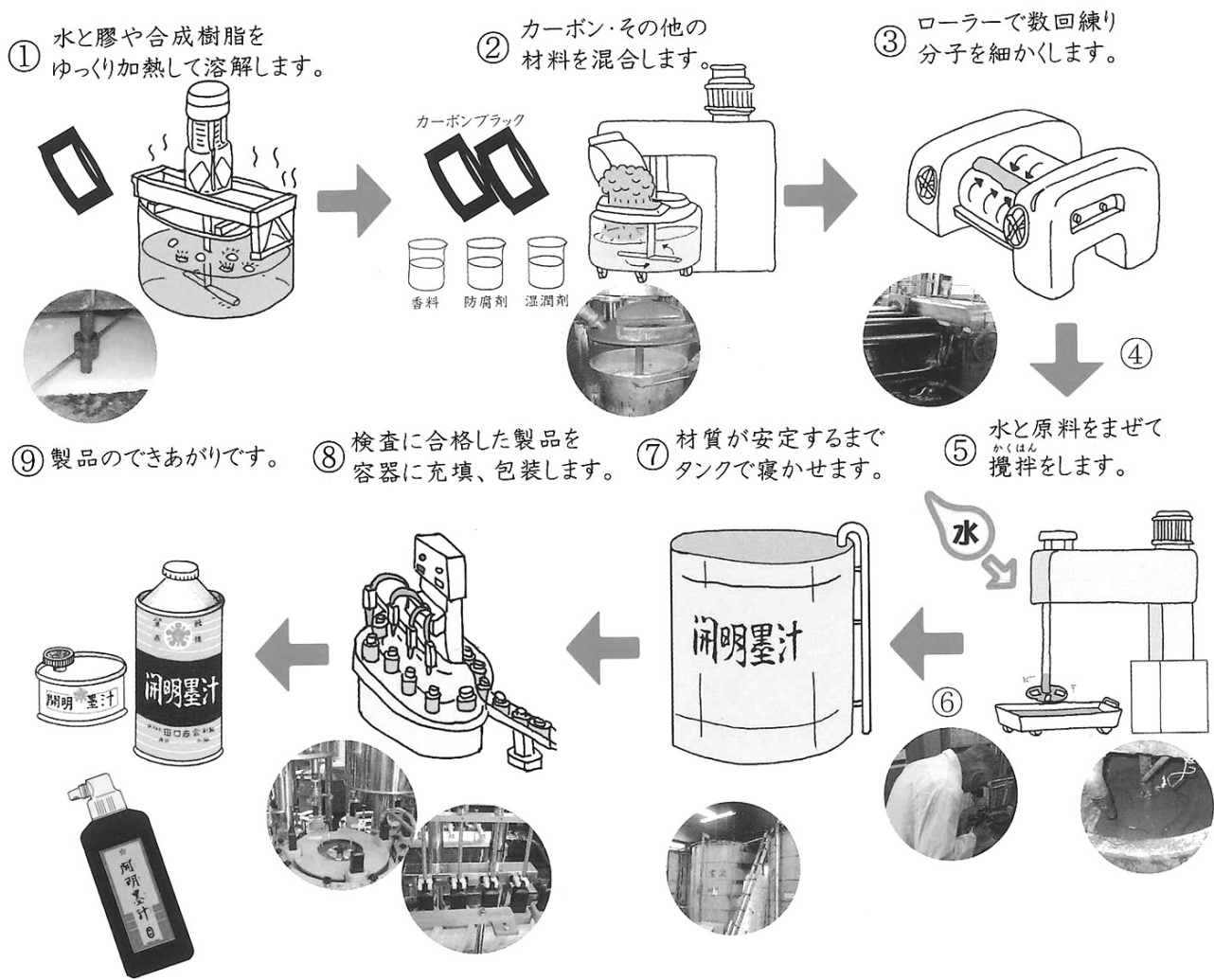
・ 膠

「膠」は動物の皮や骨、筋などを煮出して抽出
した動物性たんぱく質です。最近「天然膠」と
いう言葉が使われることがありますが、膠はそ
の性質上すべて天然由来です。膠が原料の墨汁
は、墨色に適度な光沢がありにじしみ方も自然です
が、その反面、開封してから時間が経つと膠の
品質が変化して、書き味が変わってきます。

・ 合成樹脂

膠に似た働きをする、品質の安定したポリビ
ニルアルコールなどの化学製品です。こちらは
温度による変化が少なく、腐敗しにくいという
特徴があります。合成樹脂が原料の墨汁は、乾
きが早く筆運びも比較的軽いので、学校の授業
などで使われることが多くなっています。

膠（墨汁）と合成樹脂（書液）でどちらが優
れているのか議論されることもありますが、前
述した通りそれぞれに特徴があり、できあがっ
た墨汁の性質も異なるため優劣はつけにくい、
というのが開明での見解です。



【墨汁の製造工程】

■ 墨汁の製造工程

墨汁は、主に次の工程（上図参照）を経て製造されています。

- ・ 主原料である膠または合成樹脂を水に浸し、加熱しながら溶解する。
- ・ 溶解できたら、その他の原料であるカーボンブラックや香料、湿潤剤、防腐剤を加えて練り合せる。
- ・ カーボンブラックの粒子を専用の機械で細かく分散させて、水で希釈し所定の濃度に仕上げる。
- ・ できあがった墨汁を静置し、粗いカーボン粒子を沈降させて品質を安定させる。

さらに詳細な工程は第九回（令和六年十二月号）で解説しているので、ご参照ください。

◆ 墨汁の可能性

墨汁は固形墨とよく比較されますが、一般的な固形墨の磨墨液は墨の粒子が0.2〜0.6ミクロン（1ミクロンは1/1000ミリメートル）なのに対し、墨汁は0.05〜0.25ミクロンと細かく、安定した墨色を得られます。開明が開発した製品には、長年の研究により大きささまざまな粒子を混在さ



【写真6】古墨調の液墨でも油煙系の茶墨や松煙系の青墨もあり、表現によって使い分けできる



【写真7】通常の墨汁より漫画制作に特化している墨汁もある

せ、古墨の特徴を捉えた墨汁もあります（写真6）。また、故手塚治虫先生をはじめとした漫画家の先生方にも墨汁は愛用されてきた歴史があり、漫画制作に適した「まんが墨汁」などもお選びいただけます（写真7）。

このように墨汁には、文字を書く用途だけではなく、漫画や製図用もあり、絵を描くことにも使用されます。もっと自由に、好きな言葉や絵を筆でかいてみる。電子機器全盛の世の中だからこそ、頭で考えた文字や絵を自分自身の手で表現することが重要です。そこにはかく人本

人の感情や思いが込められており、機械的な文字や図では表せない大切な「心」が宿っています。また、伝統的な技術で製造されている筆をはじめとした書道用具は、原材料不足や将来への技術継承などが課題となっています。墨汁については、工業製品のため状況が少々異なり、膠などの原料も、今のところは安定的に供給されています。

しかし、工場での生産現場では、専門家用墨汁の製造に長年の経験と知識が必要のため、大量生産がなかなかできません。弊社では幸い熟練の技術者に恵まれています。今後は新たな人材の育成に努め、技術の継承と、より効率的な生産方法を模索していきたいと考えています。墨汁が今後、「かく（書く、描く）」用具としての用途を広げ、国内外における多様な要望に応えられるよう努めてまいります。

海外には「カリグラフィ」（アルファベットを書く西洋の書道）という書に共通する文化があります。日本の土産に漢字のTシャツを購入した外国人が、その文字を自分で書いてみるのもさぞ楽しいでしょう。

今こそ「手書き」の良さを再認識する時であり、思い立った時にすぐ書ける「墨汁」がそのお役に立てることを切に願っています。